

第2回

新宿区次世代育成協議会・部会

平成22年9月2日(木)

新宿区子ども家庭部子ども家庭課

1 開会

事務局

開会挨拶

資料確認

福富部会長

皆さん、お暑いところをどうもありがとうございます。

前回御案内のように、しんじゅく若者サポートステーションの御協力を得まして、実際に若者達に対して、どういう支援がなされているのか、実態を皆さんで少し体験してみたい。早速ステーションのほうからお話を伺いたいと思います。

2 しんじゅく若者サポートステーションの活動について

サポートステーションスタッフ

まず、地域若者サポートステーションとは、どんなものなのか御説明させていただきます。

お手元の資料に、冊子があるんですけども、そちらが全国の若者サポートステーションの住所と電話番号などが載っている一覧表になります。この事業は厚生労働省の事業で、2006年度から開始した事業です。2010年度は全国で100カ所に増えております。都内のサポステは、こちらの新宿のサポートステーションと世田谷のサポートステーションをワーカーズコープが運営しております。

こちらの地域若者サポートステーション事業は、15歳から39歳までのニート状態にある若者への就労支援を目的として、個別面談、継続的な相談の実施や支援プログラムの実施、保護者へのサポート事業をメインに行っております。当初は34歳までの方が対象でしたが、2009年度から39歳まで年齢が引き上がりました。こういった支援の仕事をしていて、年齢が高齢化しているというのは日々感じておりまして、サポートステーションを利用している方も40代の方も何人かいらっしゃいます。

若者を取り巻く状況、社会情勢が変化する中で生まれた地域若者サポートステーション事業ですが、何で困難を抱える若者がこんなに増えてしまったのかというところを、皆さんもご存じのことかもしれないですけど、触れさせていただきたいと思います。

まず、景気の悪化が非常に大きく、若者にしわ寄せが来てしまっているという状況があります。新卒採用の減少から、安い賃金で活用できる派遣社員、アルバイトへのシフトへと企

業が考え方を変えていく中で、採用されても、派遣だから、1年契約だからということで本気で人に物を教えようとしなない。そのような中で働いていても、仕事のスキルも身に付かないし、なかなか人間関係も職場の中で身に付けることができない状況があります。あとは、学校から社会へという日本独特の移行のルールがあったんですけども、そちらが崩壊しつつあるということです。特に日本では新規学卒一括採用というのをやっていると思うのですが、学校から社会へとスムーズに移行できなかった若者というのが、そこを踏み外してしまうと、正規のルートに乗ることができない現状があります。今は第二新卒という枠で学校を卒業した後も就職できる方法とか、多少はよくなってきてはいると思うのですが、新卒採用で会社に入れなかった若者は、就職に必要な情報さえ収集することが難しくなる状況にあり、派遣の仕事を1年単位で繰り返したり、3カ月の短期のアルバイトを繰り返しています。そういった状況を抱えている若者も、サポステには多く訪れております。

若年無業者の数の推移ということで、別紙で資料をお配りしていますが、参考程度にお配りさせていただきました。内閣府から今年の7月に発表がありましたひきこもりの数は、約70万人の方がいらっしゃるということです。このひきこもりの数ですけども、完全に部屋から出られない方は本当に少なく、コンビニとかには外出できるけれども、家族以外の人とはもう何年間も接していないとか、友達が1人もいなくて、家族ともうまくいってなくて、話をする人が1人もいないとか、そういった状況にある方もひきこもりの定義に含まれております。

ひきこもりの調査は、前回の部会でも触れられたということでしたが、小中学校時代に学校でうまくいかなかった経験を何かしら皆さん抱えておられて、その経験が学校から社会に出るときにつまずきの原因になってしまっているということが、明らかになっております。

では、実際にしんじゅく若者サポートステーションではこういった活動をしているかを、御紹介させていただきたいと思います。

しんじゅくのサポステは2008年7月に開所いたしまして、現在、常勤スタッフ3名と非常勤のスタッフ1名で運営をしております。

2010年8月末現在のしんじゅくサポステの登録者数ですけども、「しんじゅく若者サポートステーション登録者データ」を、ご覧いただければと思います。

現在243名おられて、一般的に都内でのひきこもりは2万5,000人とされておりまして、さらに、新宿では2000人弱ぐらいになりますので、2,000人中、新宿で言いますと10分の1しか利用されていない現状であります。

続きまして、男女比ですけれども、一般的には七、八割が男性もしくは男女比2対1と書かれているのですが、こちらの登録者も男性が185名、女性58名ということで、男性が76%、女性が24%という現状になっております。

続きまして年代ですが、20代、30代が多くなっております。20代に関しては136名で56%、30代に関しましては84名で34.6%となっております。また、こちらも一般的に30歳から34歳が44%と言われておりますので、そちらに準じている形になっているかと思えます。

続きまして、学歴ですが、ひきこもりと言われる方の中には、主に高校の中退者が多いと言われておりますが、このしんじゅくサポステの利用者に関しては、まず大卒が40%を占めております。続きまして、専門学校ですとか高校ですとか学校を卒業している方も2割近くおります。特に大学卒業者が多い点に注目してみますと、一度社会に出てから適応できなかったりつまづいたりしてしまっていることが見受けられます。こちらの原因として考えられることですが、以前は企業側が一から職業人として育てていくというところがあったのですが、今は即戦力、すぐに適応できる人、見て覚えなさいという傾向が多く、そこで挫折を感じてしまう若者が増えてきていると、以前参加したセミナーでお話がありました。

続きまして、住んでいる所ですけれども、新宿区は24名で10%に満たない状況になっております。その他は東京都がほとんどで、70%近く占めています。大体この付近の豊島区ですとか練馬区が多くなっております。また、埼玉県からも通いやすいところもありますので、他の県に比べると多く12%近くを占めております。

続きまして、通院歴ですが、精神疾患の伴われる方が30%以上、発達障害の疑われる方が11%、発達障害の診断がある方が3%近くおります。面談等していく中で発達障害が疑われるようであれば、他の機関に連携を求めましてリファーする例もございます。

続きまして、就労経験ですが、全くないという方が39名で16%おります。ただ、経験があるといいましても、1週間やったことがあるとか、1カ月だけやってそれ以来何年もやっていないとか、ほんのちょっとした経験しかない方が、ほとんどになっております。

最後に、離職期間ですけれども、大体1年以上、3年以上、5年以上、そんなに差はないんですが、中には10年以上という方も30代の中にはおります。

もとの資料に戻っていただいて、新宿のサポートステーションを訪れる利用者さんがどういった状況を抱えて初回の来所をされるかですけれども、大体、皆さんコミュニケーションが苦手ですと訴えられます。それに伴って、自分の意見を言うことにとて抵抗を感じる方、人とどうつき合ったらいいのかわからない、友人が1人も居ない、家族とも関係がうまくい

っていない、短期のアルバイトや派遣の仕事を繰り返してしまっている、学校時代に何かしらのつまずき、例えば友人とうまくいかなかったこと、勉強についていけなかったこととかが原因となって、その失敗をなかなか乗り越えることができない、引きずってしまっている方が多くいらっしゃっています。あと、うつ病とか対人不安などの精神疾患を患っている方も、多くいらっしゃっております。

2ページ目をめくっていただきまして、そういった彼らにしんじゅく若者サポートステーションでどういった支援を行っているかと言いますと、最初のアプローチをしていただいた時に、個別面談、初回の面談を行っております。皆さん、最初にサポステを訪れる時には、こちらが想像している以上の勇気を振り絞って面談の予約の電話をかけてきています。あと、人は信用できない、大人は信用できないと感じている方も多くいらっしゃっていますので、まずはお話を聞くこと、一人一人の状況に寄り添うことを心がけて、じっくりお話を伺っております。私たちの支援の第一歩は、まずはこちらを信用してもらおうことだと考えておりますので、初回の面談が終わった後も、しばらくは1週間に1回、2週間に1回なりの面談を継続して実施しております。

とはいっても、支援者と利用者との1対1の関係だけでは、なかなかできないこともあります。そこで行っているのが、お配りした資料にあります毎月行っておりますプログラムです。私も、最初はこの就労支援の仕事をする時に、若者には何か足りないものを、スキルとかマナーとかを身に付けさせて社会に送り返すことだと思っていたのですが、サポステの利用者と実際に接しまして、そんなことよりも、みんなが主体となれるような取り組みを行うことが重要なのではないかと考え始めまして、なるべく利用者さんが主人公となれるようなプログラムの実施を心がけております。

その中の一つが、「地域盛り上げ隊！」という取り組みですが、これは区で行っております高田馬場駅前の清掃活動にサポステとして参加をさせていただいております。ここで、人からありがとうと言われることが嬉しかった、地域の人役に立てることが嬉しかったという感想を皆さん言うていただきました。今日来てくれた利用者さんも参加をしてくれていたのですが、そこからもっと地域の役に立っていきたい、高齢者の話し相手をしてあげたい、もっとまちを綺麗にしていきたい、そういった意見が出るようになってきています。あとは、ワーカーズコープの他の現場に行っているボランティアですとか、区内の高齢者施設でのボランティア活動というのも積極的に取り入れております。

ちょっとプログラムの説明になってしまうのですが、9月14日に行うサポステカフェ

エ実行委員会というのは、地域とつながるための運動をしようということで11月27日にサポステカフェということで、1日カフェの準備をします。これも私たちが運営するのではなくて、利用者さんに主体的に運営してもらおうという取り組みを行っております。話し time というのは、毎月3から4日行っているのですが、こちら利用者さんがテーマに沿って話したいことを話して、質問を受けてという時間として設定しております。なるべく何かを教えるセミナーではなくて、利用者が主体となれるプログラムづくりを心がけております。

このプログラム以外に行っていることとして、ジョブトレーニングを実施しております。こちらは、まずサポステの利用者さんにとって仕事をするということが、とてつもなく大きな壁になっておりまして、サポステに来て友達ができて自分への自信を回復させたとしても、すぐに仕事というわけにはいかなくて、中間的就労の場が必要だと考えております。その中間的就労の場としてジョブトレーニングを毎日行っています。今は、新宿区の地域交流館におきまして、3時ぐらいから夕方5時半ぐらいまでの清掃の仕事をいただいております、そちらを利用者さんのジョブトレーニングの場にしております。月曜日から土曜日まで毎日行っておりまして、シフトを組んでペアになった方と協力しながら清掃を行う場を設定しております。どこか1つの場所に1人で行くのではなく、仲間とジョブトレーニングに入ることが、参加をしている方たちに大きな力を与えていると考えております。

それ以外に、職場体験、職場見学、外部の方をお願いして、お仕事講話なども実施しております。

に「外部の企業・お店の開拓」とあるのですが、昨年80社近くの企業さんを訪問しまして、こういった若者がいるんですけども、受け入れてくれないかとお願いに参りました。ところが、理解をしてくださる所は2社ぐらいしか見つかりませんでした。その2社の担当の方は、今でもサポステの若者にかかわってくださっており、私たちだけでは与えることのできない力を若者に与えてくれております。

今後の課題としましては、やはり昨年の企業訪問を通して感じたのですけれども、求人に応募してどこかの会社に就職するということには、限界があるなと改めて感じております。サポステの利用者さんは、コミュニケーションが苦手だと訴えてくる方がほとんどですけれども、実際の彼らに接していると、皆さん、お話ができるんですね。でも、社会で求められるのはコミュニケーション能力だと当たり前と言われていることが、サポステの利用者さんをすごく苦しめているのではないかと感じております。本当にサポステを利用する若者が、ありのままの姿で働ける場所が必要ではないかと今は考えるようになっております。

私たちはワーカーズコープとして地域に必要な仕事を起こしていこうという取り組みをずっと行ってきました。そういった経験を生かして、サポステの利用者が働ける場所をつくらうということで現在動いております。その一つが銭湯の清掃なんですけれども、先ほど御説明いたしました地域交流館での清掃の活動を見られた銭湯の御主人が、私たちの銭湯も清掃してくれないかと声をかけていただきました。地域交流館で清掃をしているのはこういう若者ですよと説明いたしましたら大変共感をしてくださいまして、銭湯も高齢化が進む中で、店を手放さなくてはならない状況があるということで、若者が働ける場所と、後継者不足で悩んでいる銭湯が結びつく可能性を見出した思いなんですけれども、そういった若者が働ける場を今後積極的につくっていきたいと考えております。

3 しんじゅく若者サポートステーション利用者のお話

私たちスタッフからいろいろ御説明しても、ピンと来ない部分もあるかと思います。今日は、サポステの利用者さんも参加をしてくれていますので、経験を皆さんにお話をさせていただきたいと思っております。彼は今年の4月にサポートステーションに初めて来てくれました。サポステに来る前は12年間のひきこもりをしていました。サポステで面談、セミナー、プログラムを積極的に受けて、ジョブトレーニングにも参加をし、さっきお話ししましたクリーニング工場でアルバイトをしながら、今やりたい仕事に向かって歩き始めている利用者さんです。

サポートステーション利用者

今回はひきこもりについて経験談を話して欲しいということなんですけれども、直接のひきこもりのきっかけから話させていただこうと思います。

個人的なことなんですけれども、高校時代、学業不振をしてしまいまして、その時ちょうど自分はアトピー持ちだったので、アトピーがかなり悪化してしまって外に出たくなくなりました。そういうので外に出るのがおっくうになってしまって、それで学校に行く日も少なくなっていて、不登校状態が続いたんです。高校は担任の方の機転で卒業することはできたんですけども、それ以降は特に外に出ること自体が本当に怖くなってしまって、出ることがなくて家の中でずっと閉じこもったまま、気づいたらそれで本当に長い間経ってしまったということなんです。

サポートステーションスタッフ

長期化してしまった理由は、どこにありましたか。

サポートステーション利用者

家にいることができた環境があったということも、原因の一つなのかなと思う。働かざるを得ない状況になったら自分も多分出ていただろうし、そういう状況になかったので、ある意味、家の部屋の中は居心地がよかったので、そのままずっと時間が経ってしまったのかなと思います。

サポートステーションスタッフ

12年間のひきこもりの間、どんなことを考えていましたか。

サポートステーション利用者

自分の将来のこととかは実際考えていませんでしたね。たまに考えることがあっても、それは全部自分の内面の問題だとか、そういうことばかり、ほとんど堂々めぐりでした。毎回同じことを考えては、その繰り返し。自分の将来については、本当に何も考えていませんでした。

サポートステーションスタッフ

ひきこもり状態を脱出するきっかけは、どういうところにあったというふうに思いますか。

サポートステーション利用者

何か大きな出来事があったわけではなくて、自分は今29なんですけれども、30という関連が1つあったのと、家族の姉が家に帰省ということになって、そうなる自分は居心地が悪いかと思ったので行動しないといけないと、本当に些細なことなんですけれども、そういったことから、こちらのサポートステーションに連絡を取りまして、何とか社会復帰していかないと行動を起こしました。

サポートステーションスタッフ

サポステに来て、どんなことをしましたか。

サポートステーション利用者

コミュニケーションセミナーで、まず会話する時の基礎的なことを学んだり、あとはジョブトレーニングという就労訓練に参加させていただきまして、働くということ自体が自分は初体験だったので本当にためになりました。社会に少しでも自分は貢献しているということで、少しは自信がついたのかなと。現在は、サポートステーションから紹介されたクリーニング工場でアルバイトとして、正式に働かせてもらっています。

サポートステーションスタッフ

ジョブトレに参加してから、私は何か変わってくる様子がすごく感動したんですけども、ジョブトレに参加して一番大きかったことはどんなことですか。

サポートステーション利用者

一番大きかったのは、働けるというか、自分にとって社会というのは働くことでしかある意味かわれないのじゃないかなと思った。働いていないということが、一番自分の外の世界に対して恐怖というか、それが一つの一番大きな負目だったので、アルバイトではありませんけれども、それを見出すことができたというのは自分にとっては、本当に大きい経験でした。

サポートステーションスタッフ

前、何か話してくれたときに、ジョブトレの仲間が存在がすごい励みになっていると話してくれたけど。

サポートステーション利用者

本当に友人も一切いませんから、顔見知りができただけでも外に出る励みになるというか、そういうのがあります。

サポートステーションスタッフ

今、週6日だけ、クリーニング工場でフルで、そして自動車免許も取れて、何か動いている中で、ふとした瞬間に感じることでかかってありますか。

サポートステーション利用者

やっぱり景気が余りよくないですから、自分は将来できれば正社員になりたいですね。そういうふうに通じていけるのかとか、そういう不安はあります。

サポートステーションスタッフ

クリーニング工場のほうは、どうですか。

サポートステーション利用者

地域の方に支えてもらっているので、本当に感謝するばかりです。

サポートステーションスタッフ

働いていて今感じることで、感じていること、夢とか目標とかは。

サポートステーション利用者

普通になりたいですね。

サポートステーションスタッフ

普通になりたい。普通ってどういうことだろう。

サポートステーション利用者

自立して自分の飯は自分で稼ぐ、そういうふうになりたいですね。

サポートステーションスタッフ

今、振り返ってみて、こういう仕組みがあったらよかったとか、そういうことってありますか。

サポートステーション利用者

自分が、ひきこもっていた時に1度だけ、おじから仕事を紹介されたことがありました。その仕事というのは、会社の社員の英語講師をして欲しいということで、自分は海外に住んだことがあって、英語は少しできたんですけども、ですが社員に英語を教えるというレベルまで到底自分は及んでいなかったなので、その件は拒否しました。もしその時、自分ができる範囲内での仕事の依頼があれば、自分に違った道があったのかなと、今では思っています。

そういった意味で、やっぱり親というとどうしても距離が近過ぎてしまって、親から何か仕事を紹介されたとしても、多分、自分は拒否していたと思います。それから、あと新宿区役所だとか、そういう公的機関だとか、あとは第三者のそういう支援機関から直接接触があったとしても、自分の場合は拒絶してしまうのではないかなと思うんですね。その点、おじとかおばとか、あるいは兄弟だとか、あるいは友人、知り合いだとか、そういう距離が遠過ぎず近過ぎずという、そういった距離の身内の人だとかと知り合いの人に、できる範囲内でのハードルの低い仕事を紹介してもらっていけば、都合のいい話ですけども、そうしたら多分自分もかなり積極的に、やっていたんじゃないかなと思います。

あと、大きな話になってしまうんですけども、ひきこもりから出た後の課題というか、今、自分がすごく実感するのが、正社員へのハードルがとてつもなく高いということです。自分の責任なんですけれども、一度、高校へ行って大学へ行って、大学卒業時に就職してというような、そういったルールから外れてしまった後に、もう一度社会に戻れるような仕組みとして、出入りが激しい、簡単に出入りできるような環境があると、ちょっと変な話ですけども、自分もそこに紛れて一緒に入り込みやすいのではないかなとは思ったりはしています。

サポートステーションスタッフ

今、同じような悩みを持っている人に対して何かエールを送るとしたら、どんなことが言えますか。

サポートステーション利用者

自分も29で外には出てこうなったので、始めるのに遅いことはないというか、いつでも始められるというのは言いたいですね、あきらめる必要はないかな。

サポートステーションスタッフ

では、最後にこれだけは言っておきたいということがあれば。

サポートステーション利用者

今日はこのような機会をいただいて本当にありがとうございました。人には本当に千差万別というか、いろんな人がいるので、自分の経験は必ずしも一般化できないですけども、でも自分の経験談が何かの役に立てれば幸いです。

サポートステーションスタッフ

今日は、ありがとうございました。

この後、早速クリーニング工場へまた、アルバイトへ行きますので、ここで失礼させていただきますが、ありがとうございます。

4 支援者から見た若者の抱える課題

サポートステーションスタッフ

レジュメの3ページ目に移っていただいて、こういった取り組みをして感じる、若者が抱えている課題といたしまして、大人への不信感があるという方が多くいらっしゃる、彼らに本気で向き合う大人の存在が必要だと思っております。私も彼らにとことん向き合う大人の存在としてありたいと、日々感じながら支援を行っております。

あとは、失敗体験からの立ち直り、やり直しができなくなっているということですが、具体的にいじめに遭った経験があるという方もいるんですけども、いじめに遭ってなくても、学校の時にクラスメートとの関係がうまくいかなかったこと、誰しも経験していると思うのですが、そういったうまくいかなかった経験というのが、自分の人生がすべて失敗なんだというふうに行き着いてしまっている方が本当に多いなと感じております。今話してくれた利用者さんは、学校での勉強がついていけなかったことが劣等感になってしまって、そこからひきこもり生活が始まったんですけども、そういった勉強についていけなかったとい

うことを伝える方がいらっしゃれば、相談できる誰かがいれば変わっていたことがあったんじゃないかなと感じます。

社会へスムーズに移行できなかった若者に、仕事を見つけたかったらハローワークに行けばいいじゃないかと言う方もいらっしゃいます。私もよく利用者さんと一緒にハローワークに行くんですが、何で行くかという、皆さんハローワークに行ってきましたと言うんですが、行ってきてどうしたのと聞いたら、部屋に入って出てきましたと普通に言われるんですね。何で求人票を出さなかったのと聞くと、求人票を印刷したら応募しなくちゃいけないから怖くてできないと言うんです。なので、私は、一緒にハローワークに行って、一緒に検索して、紹介状を出してもらうところまで付き添ってということをやっているのです。ハローワークという存在が彼らにとっては本当に恐ろしいところで、働いたことがなくせに、仕事は地獄ですと言う方もいらっしゃいます。

こういった状況を踏まえて「若者支援において必要と感ずること」という部分なんですけれども、縦のラインを越えたネットワークの必要性を痛切に感じております。ここは自治体の方と一緒にできるところなのかなと考えております。縦のラインを越えたネットワークでできることというのは、当事者の早期発見という部分です。サポステを訪れるようになるのは大体 20 代後半から 30 代になってから、先ほどの利用者さんも 29 歳になってから訪れたのですけれども、もう少し早く彼に出会っていれば何かできることがあったのではないかなと思います。30 歳を超えてしまうと正規の仕事に就くというのは、この雇用情勢では難しくなっていますので、いかに早期発見できるかが課題かなと感じています。サポステは全国に 100 カ所ありますけれども、どこのサポステさんも、どうすれば早期発見できるか悩まれております。サポステはサポステで行うこと、教育機関は教育機関で行うことと、今は分断されてしまっているのですが、各機関の専門性を生かしてその若者の発達段階に応じた支援を行っていくことがとても重要ではないかと考えております。

そこで出てくるのが個人情報の壁ですけれども、自治体の方とお話をしていると、二言目には必ず、そうは言っても個人情報はどうするのと言われてしまうんですね。例えば教育機関での不登校の生徒を多分把握していると思うのですけれども、そういった情報をサポステで早くキャッチできていれば、もっと早くアプローチできるのではないかとこのころで、なかなか学校に入っていけないもどかしさを感じております。個人情報の壁を乗り越えるために、何かしていかななくてははいけないと考えております。

あとは、何よりも地域の方たちとこういった問題を共有する場を持っていきたいなと感じ

ております。先ほど、自分の経験を最初本当に嫌がっていて、でも自分の経験が役に立つならということでお話をしてくださった利用者さんすけれども、サポステ来所時は常に下を向いていて、1回も目が合うこともなく、にこりもしない。今もすごい緊張していたのですが、ジョブトレーニングを通して仲間とともに仕事に向かう喜びを体験しまして、サポステの近所にあるクリーニング工場の社長の励ましとか根気よく仕事を教えてくださる姿に触れて、どんどん明るくなっていった元気がなくなりました。そういった姿を通して、サポステだけでは若者を支えることには限界があるなと感じ、地域の方が若者に大きな力を与えるということをこの取り組みを通して確信しましたので、いかに地域の方たちに私たちの活動を知っていただくかが課題と考えています。

あと、先ほどもお話ししたのですけれども、学校在籍中からの支援が必要ではないかと考えています。

私たちの団体が運営しています、くしろ若者サポートステーションという所があります。そこでは、定時制高校で定期的に個別相談会を実施しております。そこで新たな当事者を発見して支援を開始することができたという取り組みもありまして、学校に外部の支援団体が入ることは意味があることなのかなと考えております。学校時代から進路相談という重いものになってしまうのですけれども、友達との悩みを相談できる人とか、学校の勉強についていけなくて相談できる人といった、学校時代から相談ができる関係性を私たち民間団体が構築していくことも意味があることなのではないかと感じております。

私たちからの説明は以上になります。

- 5 質疑応答
- 6 意見交換

福富部会長

ありがとうございました。皆さん、さっきの利用者さんのお話を伺っているいろいろ考えさせられること、多かつたのではないかと思います。

そこで、できる限り、お答えいただける範囲で結構ですので、いろいろと御質問、皆さん、あるんだろうと思います。ここでどうぞざっくばらんに、こんなことを言ってみたいということがございましたら。

委員

今のお話を聞いて、サポートステーションスタッフの方が学校に入ってきていただくのは、特に中学校、すごく入ってきてくださいという感じなんですね。

統計でも1クラスに1人ぐらい、不登校の子がいるという感じです。それに当たる親御さんも、自分の子どもが今まで小学校ではどうにかこうにか行っていたのに、中学校になったら何か環境の変化でつまずいて不登校になってしまうというので、すごく困惑していて、恥ずかしいというのもあるのかもしれませんが、それ以上に自分の子が心配なのですごく相談に行きたいと思うのですけれども、どこに行ったらいいかわからない。それまで不登校のこととかどこかに相談することとか、そんなに意識していないので、当たったときに情報がないんですね。というところで、今はスクールサポーターがいらっしゃるので区役所とかも含めて紹介もしたりはするのですけれども、うまく紹介した所へ行っても、たまたまうまくその人とコミュニケーションできないとか、うまくわかってもらえなかったみたいなこともあるので、少し数を打つ必要もあるんだなと思っています。その1つ選択肢が増えるというのは物すごくいいことじゃないかなと思います。

また、PTAの講習会みたいな形ですね、やろうと思えばやれる学校が、学べる環境があるのですけれども、今まで、ひきこもりについてとかというテーマは設定されているのを見たことがない気がしていて、だから逆にお願いしたら来ていただけるのですかという質問なんですけれども。

サポートステーションスタッフ

ぜひとも。今までも、教育委員会の方とは会合が何かでお会いしたのですが、具体的にそういったお話になかなかできなくて。

委員

ちょっとそれについて、僕も学校を卒業して随分たって、今の学校の事情はどうなのかわかりませんが、学校の中で教育に携わる人は、不登校があったり、不良行為があるような生徒は自分の中学には居ないのだということが認識の中であって、それが表に出たくないんです。でも、保護者のほうは、そういう子が居るんだとわかっている。今、自由な選り方で学校に行きますよね。そうすると学校では、問題児を抱えている学校ですよと表へ出てしまうと、入学率が下がってしまうんです。だから、サポーターとかいっぱいいらっしゃると思うのですけれども、本当の活躍はしていないし、今この勇気ある発言で学校に来てくださいと言ったけれども、今度、学校の先生方はどんな感じを持ってそれを見るか。だから、

うまく学校の先生と、あるいは教育委員会と連携を持ってやってもらいたいと思っています。

サポートステーションスタッフ

その壁が一番大きくて、今年度から高校の中退者へのアウトリーチ事業というモデル事業が始まって、高校中退した人への家庭訪問をして支援を開始するという取り組みが50カ所のサポステで始まっているんです。すごく熱心な進路指導の先生に出会えると、学校に入っていく道筋が立つのですが、外部の人が入るなんてもってのほかという方のほうが大多数みたいで、そのアウトリーチ事業を受託している50カ所のサポステでは学校に入っていくのが本当に難しいと悩まれています。私たちも今後の課題にしていきたいと思っています。

委員

先月の部会で、こういうお話がありましたので、地域に入りまして、各小学校の皆さんとか地域の役員の方たちに話を伺ったところ、うちの学校はいじめはないわよとか、不登校もないわよとか、すごくみんな仲よくできていますよというお声のほうが多いんですね。ということは、学校サイドも自分の学校のことは余り外に出したくない。まして、今、新宿区は選択制ですから。せっかく国がこういうことを取り組んでやっているのに、関係をつくることできないということは非常に残念なことだなと思います。

委員

ちょっと根本的な話になってしまって恐縮ですけども、先ほど、しんじゅく若者サポートステーションの現状ということで御説明いただいたんですけども、ここは新宿の場所にあって、しかも非常に地の利がいいということで、他の区の方や県の方の参加が非常に多いということでした。実際、新宿にいらっしゃる方が10%弱というような状況で、果たして本当にそれでいいのかという、問題提起を1つしていきたいと思うのです。

これは、発見できなくて隠れている方が相当地域におられるだろうという中で、他の区から来る方を全然受け入れないということを申し上げているわけではなくて、もっともっと深い、先ほどの親の認識という問題提起がありましたけれども、この辺はいろいろ考えていかなければならないし、新宿区としてもすごい大きな問題になるのかなと。あとここに来られる方はまだまだいいと思うんですね。出てきていない方が心配だということがあるので、発見ということに関して言えば、これは親御さんからの発信をどう受け止めるのか考えておく必要があるということで、学校の対策よりも地域社会を中心にやってもらいたい。

また、発達段階からいきますと小学校の中学年、いわゆる4歳、5歳から10歳、これを何とか早く食いとめて、支援に結びつける施策が必要だと思う。

福富部会長

今の問題提起というお話は、そういう子どもたちがあらわれているというのは事実ですね。それをどう食いとめるかという発想はすごく大事だと思うのですね。と同時に、やっぱり現にあるわけですから、その子どもたちに対してどう対応するか、それは両方混同して考えてしまうと非常に混乱してくるので、今困っている若者たちにどう対応していくのかという対応がサポートステーションだと思うんですね。そこに今日は少し焦点を絞ったほうがいいのかな。

それともう一つは、やっぱり教育問題にかかわっているような状況で、なぜそういう子どもがつくられてしまっているのかという原因は、これは行政として考えなければいけないだろうと思います。

委員

先ほどの利用者さんは、すごいスピードで自立されてきていると思うのですけれども、親御さんとも御連絡とかされたりしていたのですか。

サポートステーションスタッフ

お母さんとは、電話でやりとりをしていますね。子どもが元気になっていくと、お母さんも元気になっていって、明るくなっています。

サポステに初回で相談される方は、御本人であるケースが多いのですが、お母様が初回相談にいらっしゃって、2回目に子どもを連れてくるというパターンですとか、保護者の方からの相談を受けて本人につながるまですごく時間がかかるケースというのもあります。あと、親が無理やり連れてくるケースの 때가一番難しく、本人は利用する気はさらさらなのに、親が無理やり連れてきたから、ぶすっとした顔で座っていて、こっちもアプローチがしづらいというか。

また、厚生労働省への報告というのが、3カ月の時点と6カ月の時点でどれだけ変化したかというのを報告するんですね。でも、半年で結果が出るというのは本当になくて、就職活動に乗れるようになるまでが、大体1年はかかるんです。

福富部会長

質問なんですけれども、先ほど、何かを教えるというセミナーよりも、実際に子どもたちや若者が自分が主役になれるようなセミナーをとおっしゃいましたよね。それはすごい視点だなと思ったんですけれども、それとジョブトレーニングはもう一方独立にある。その関係というか、ジョブトレーニングは文字どおり解釈すると訓練ですよ、そのことと先ほどのプログラムの関連というのを、もう少し説明いただけるとありがたいのだけれども。

サポートステーションスタッフ

利用者さんの状況にもよるんですけれども、まずは面談で信頼関係を作っていくって、そこからすぐにセミナーに参加する方もいるんですが、こういったプログラムに参加をし、ちょっとずつ他の利用者さんとの関係を築いてきたりとか自分の意見を言えるようになってきて、その先にジョブトレーニングというのを設定しています。その利用者さんの状況によっては、ジョブトレーニングに参加しながら、プログラムに参加したりという方もいらっしゃいますし、ジョブトレーニング参加中は、他のプログラムは一切出ないという方もいらっしゃいます。

委員

各論的になるかもしれませんが、1点はステーション側の内容で、半年でなかなか結論が出ないお話がありましたけれども、サポート期間とか費用というのはどのくらいかかるのでしょうか。

それから、2点目お聞きしたかったのは、これは実際に利用者さんにお聞きしたほうがよかったのかもしれませんが、対策といいますか、ひきこもりにならなかったかもしれないというような予防的なことを知りたかったのです。それはもう本人がいませんから恐らくわからないので、逆にサポートステーションとしてお仕事をなさっている中でいろいろ話を聞いた結果から、こういうことを幾つか注意するとひきこもりというのは防げるのではないかという手法があったら教えていただきたい、こう思います。

サポートステーションスタッフ

利用者さんから費用は、いただいております。

委員

期間については、何年もかかったら結論が出なくて、もう終わりですと言うのか、ある程度引っ張って行って、3年とか5年とか、5年いくかどうか知りませんが、そういう期間的なことはどうなんでしょうか。

サポートステーションスタッフ

サポート期間というのも、特になくて、むしろ仕事が決まった後のほうが苦勞することが多いですね。2年通ったからあなたはもう来てはだめよということではなくて、通ってきている人はずっと通ってきています。仕事に就いた後に必ず土曜日の夜来て仕事の相談をしますか、そういったことも行っています。

委員

利用者同士が集まって、いろいろ話し合いをするということはないのでしょうか。

サポートステーションスタッフ

もちろん、仕事が休みの日には、仕事が決まった後もプログラムに参加をして、あの子ども頑張っているから、私も頑張ろうというふうに、他の利用者から元気をもらってまた出発していくということは本当に多いですね。

委員

ありがとうございました。

2点目は、ひきこもりの予防対策というか。

サポートステーションスタッフ

いろいろ感じることはあるんですけども、まず何かあった時にちょっと相談できる相手が居るか、居ないかというのはすごく大きいのかなと思います。あとは、学校というものが絶対的な存在として彼らの中にあって、学校でだめだと他に行く場所がなくなってしまうんですね、若者にとって、子どもにとって。学校以外のコミュニティーがあればまた違うのかなと。私も高校生の時にちょっと学校に行けなくなったことがあるんですね。その時に地域のおばさんですごくおせっかいなおばさんがいまして、近所をうろろしていると、どうしたのと言われたりとか、あと近所ですごく面倒を見てくれるお姉さんがいて、その人に相談に乗ってもらって、じゃまた学校に戻ろうかなと思えたんですね。私は不登校3カ月で済んだのですけれども、何かそういう人が居たか、居なかったかですごく違うのかなと私の体験では感じます。

委員

そうですね。大人であっても会社へ勤めに行くのが嫌な時もありますから、子どもは特に多いと思いますね。そういうことを踏まえると、相談できる人が居れば、一番それはいいと思うんですね。今言われるように、特に駆け込みができる、自由に物を言える所があったらすばらしいと思いますね。結局、身近な人に言うと、おまえ、そんなことをわからないの

か、何で行かないのとか、それを頭ごなしに言うでしょう。そうすると、やっぱり受ける立場になったら萎縮してしまうと思うんですね。そういうことを踏まえて、子どもだけの駆け込み寺というようなことも地域につくるのか。ある程度もっと広く大きい目で見てつくるのかわりませんけれども、何か考えたらいい方向に行くのではないのでしょうか。やはり予防というのが一番大事な感じがするんですね。発生したら、それは早く気がついて、早いうちに手当てをすることが大事だろうと思うんですね。でも、自分から嫌なことを手を挙げて言う人というのは居ないと思うんですよ。私、ひきこもりですなんてなかなか外に向かって言いませんよ。それから、家族だって言わないと思うんです。地域の人も、もぞもぞして、陰では言ってもなかなか面と向かっては言わない。そういうことを踏まえると、やはりお互いがお互いにそれとなく注意をする。それ以上に、自分がいつでも相談に来られるような場所を設けることが、私は先決ではないかなと思うのです。

委員

私もお聞きしていて、先ほど数の御報告があったのですが、20代が56%、30代が34%ですよ。子どもが成人するまでの間にいろいろな課題が生まれたとしても、それは巣立つまでの過程ですからいろいろあって当然、そしてそこにさまざまな方がかかわるのも当然、しかしもう大人ですからね。その方たちが、しかも長年にわたって解決しなかったものを、ずっと抱え込みながら今がある。その時に、先ほど部会長がおっしゃいましたけれども、このプログラムがとてもすばらしいと思ったのは、この利用者が主体となるということが物すごく重要だと思います。やはり1人の大人として認めるという、しかもその方たちが他者に対して信頼感を持っていない、そういう方たちを認めている。これがこのステーションで、先ほどの彼のように自ら語ってくださる方が育ったというのは、そういうことなんだわというふうにすごく思いました。

ただ、親も、我が子が20になり30になり課題があるという苦しみは、推し測れないと思うんですね。相談もできにくいし、あなた、ここをちゃんとしなさいなどということもなかなか言えない。言ってもそれが解決にならない。そういう意味で、近くよりちょっと離れたところからの利用者が多いというのは、やはり理由があると思うんですね。ですので、こうしたセンターが機能するときに、確かに区の方たちのためにという思いはあるんですけども、近いから行かれない、ちょっと離れているから安心して自分のことが語れるという広域性のよさといいますか重要性というものも認識して、それぞれの地域がつながっていくというのでもいいのかしらということですね。

サポートステーションスタッフ

近くにサボステがあるのに、あえて遠くのサボステに行くという方も多くて、知り合いに会いたくないからということなんですよ。なので、何か区で分けるのではなくて、例えば新宿だったら杉並区さんとか中野区さんとかと、共同でできることはないのかなという思いもあります。

委員

先ほどの彼のように自分の方向性が出てくると、多分近くでもリーダーシップをとることができると思うんですね。すごくゆっくりと温かな眼差しで、やっていらっしゃるのがわかりました。

福富部会長

でも、彼が正社員ということになった時の話というのは、彼の中でまた重いものがある。決して彼はそんなに解決はしていないだろうし。それはこの年齢になった時には、とても社会全体の中では非常に難しい課題ですよ。そのところが、一つ行政とか、そういうところが社員にサポートできるようなシステムづくりを、あるいは道づくりをする。

サポートステーションスタッフ

利用者さんの最後あたりの話の中で思わずメモしたのが、もう一度社会に戻る、そういうような社会を作って欲しいと彼は言いましたね。すごく我々に課されている問題提起を言っているんですね。私たちのワークスコープの場合は、それを普通の一般的な就労ではなくて、自分たちで作ろうねという運動を広げたいんですね。ここはまだまだそんなに成功しているわけではないんですけども、今80社訪問しても2社ぐらいしか共感してくれない状況の中ではなかなか一般的な就労には難しい。とすれば、自分の身の丈に合わせた仕事を自分で作るということも、考えているところですね。

委員

さっきのお話を聞いていて思ったのは、彼をもう少し育てれば、それに周りが刺激されると思うんですね。きょうは初めてお話したということですけども、機会を与えてあげると私はいいと思うんです。彼も自立をする足がかりになると思いますね。それが自信につながっていくのではないかと思います。人に会うこと、人前で話すこと、そういう積み重ねではないか、経験というか体験というか、その辺が大事な感じがしますね。

サポートステーションスタッフ

そうですね。やっぱり社会に関係してつながっているということが励ましていくのだろうと思います。彼のようなひきこもりが長い若者たちでも、今日みたいなところで発言することによって社会との関係がつかれたらいい。何かいい関係がつかれば彼自身の成長にもつながっていくだろうし、そういう仕組みをつくっていきたいと思いますね。

委員

利用者さんの話をずっと聞いていて「今日こういう機会を与えられて話させていただいたことにとっても感謝している」ふうに言われる、その言葉の重みをすごく感じまして、いいスタッフの皆さんが頑張っていたらできるのだなというのをすごく思いました。それで、正社員というのもすごく大変でしょうけれども「ちょっと近くて遠過ぎない人が仕事を紹介してくれるといいのかな、親だったり公的なものではあれだけでも」というのが、すごく本音というか心の中が見えたような気がしています。

委員

利用者はひきこもりをしている人だと思うのですが、原因を考えると、個人の身寄りだとか生活だとか、家庭環境というところが原因していると思うんです。そして彼たちがひきこもりがしやすくなるのは、1人でいても十分生活ができる。自立しなくても居場所がある。他と接触しなくてもパソコンとかラジオとかテレビ、そういうものがあるわけで、そうすると居心地がいいわけですね。その居心地がいい中から、わざわざ世の中に出て、居心地の悪いところに自分をさらけ出しながら生活していくこともないと考えている人もいるかもしれない。そうすると、家族とか親戚もなんですけれども、多分この子が今ひきこもりだということをわかっているはずなんですよ。そういう親たちの教育というか、そういう部分をもうちょっと大きくやっていただけるような場所があればと思うのですが。

福富部会長

その議論というのは常にひきこもり論で、前面に出てくる議論なんです。でも基本的にひきこもりの方というのは、一人ひとり状況が違うと思うんですね。その中で、ある意味では親の甘やかしなんだということにくっってしまうと、個々のケースに対する対応はとても難しくなってしまうのではないかと。10人のひきこもりの方がいれば10通りの原因というのがあると思うんですね。その中で、親の持つ問題もいろいろな階層性があって、それをくっつけて親を教育すればということだけで論じてしまうとかえって難しいというか、そこが今ひきこもりの非常に苦しいところで、確におっしゃるとおりの要素はあると思う。

委員

親はどこへ相談に行けばいいんですか。

福富部会長

だから、そこでできるだけ早く気軽に相談できる機会を、どうつくっていただけるのかと、そこですよ。

委員

そうですね。

最近、50歳でひきこもりの男性が居るんですけども、その男性は秀才だったんです。それで、20年前に原因はわかりませんが、ひきこもっちゃった。だから、考え方はしっかりしているんです。表に出なくても生活はできている。お金もある。何にもしなくても大丈夫だ。けども、世間から見るとひきこもりと思われているんですね。それでも、幸せな人は幸せなんだよね。

福富部会長

現象としては確かにそうかもしれないけれども、これから仕事をしなければいけない若者と、仕事をある程度した人では違うのではないかな。

委員

このサポートステーションのパンフレットは、出張所とかに置いてあるのですか。

サポートステーションスタッフ

これは各関連機関さんに、お送りしているんです。ハローワークさんとか、あと自治体のほうにも、お送りしているのですが。

委員

結構、各家庭に回りますので、ちょっとお互いの周りもポストに入れてあげたらいいかなと思いましたので。

委員

私も、すぐ近くに10年ひきこもっている女の子がいて、この後ちょっと面接をして帰ろうかなと思っているんですが、やっぱり親は物すごい苦しみで、区や教育委員会にケースの相談とか、いろいろ通っていたんです。でも、私も本当にこの部会に入って初めて恥ずかしながらこの場所を知ったということで、すぐお母さんに、今日その後お話に行くからということで約束したんですけども、普段から言うように知らないんですよ。我々、ちょっとでも目に入っているものでも知らないで、根本的にもうちょっと広めたらいいと思います。

委員

わからないからといって、そちらの準備不足だとかヒアリング不足だと言っているわけではなくて、我々のほうも積極的に情報を集めに行くということが大事ということがありますものね。

サポートステーションスタッフ

私たちも広報が、すごい悩みです。

福富部会長

今日はそういう意味では、ちゃんと地域の方がいてお話ができる機会です。

それで、さっき委員さんが、学校に来てくださいますとかおっしゃってましたね。それはど
ういうイメージなの。ちょっと僕の中でイメージがわからない。

委員

保護者も勉強しましょうという企画を立てるとというのが、PTAの一つの仕事だったりするんです。

福富部会長

PTAの集まりにこちらの方が講師として、そういう意味ですか。

委員

講師としてお越しいただいて、今問題になっているひきこもりとか、そういった部分というのは、親の教育をするのであれば、何も自分が被害者とか関係者になっていないうちに、単に知識として「ふうん」という時に入れておかないと。

福富部会長

わかりました。それはグッドアイデア。

今、国を挙げてこの問題はやろうとしていますよね。ちょっと前の男女共同参画という面で言うと、これも国を挙げて参画社会をやりましょうということになった時に、新宿区としてはその参画ということに関して積極的に進めている事業者というものに対して、区として認めるという取り組みをした。それと同じようなルートも、やってやれないことはないのかもしれない。それは考慮の一つになると思います。例えば、そういう子どもたち、若者たちを引き受けられるような企業に対しては、むしろ区がこういう優良企業ですよという形で、単なる優良企業という認定の効果がどこまであるかわからないけれども。

委員

ちょっと今お話を聞いていておかしいなと思ったんですけども、就職された後のほうが実は大変だというお話だったと思うのですが。キャリア相談とか、その方がここに来てしまうと、ひきこもりの方がまずそのレベルまで上がることをサポートする所だとすると、上のレベルで就職を一応できましたという方は違う機関で引き受けていただくとかしないとかパンクしちゃいますよね。今、児童虐待は多くの通報を受け、もういっぱいですという感じじゃないですか。そこと同じ現象になっちゃって、本当は助けなければいけないのに違うところが大変になってしまうのであれば、他の機関との連携とかしないと。

あとそういった正社員になるということになると、社会の構造的な問題もあって、何で正社員になりたいのかということも掘り下げないと、それは正社員じゃなくてもいいんじゃないという話があるし、正社員になると責任とかなんとかもすごい、逆にそれに当ってまたずっと谷間にいたりということもあるので、またちょっと違う視点でアドバイスしてあげないと厳しいななんて思ったりしましたね。今は逆にそこも含めてこちらの団体というか機関がしてくれているというのは、ありがたいことではあるんですけども、他の機関の連携とかいづれも考えていかないと、いい企画なのにだんだん難しいものを抱えていっちゃうなと思います。

サポートステーションスタッフ

今のところ、始まったばかりの制度ですから、そこまでいっていないのですけども、多分、エンドレスでやっていかないと、おっしゃるようにパンクしてしまいます。

委員

さっきの利用者さんもリーダーみたいな者になって、来た人たちをまた指導したりお話しして、そういうふうな循環ができるといいのでは。体験をサポステのフリーター養成が何かで活かして、より一層サポステにいらっしゃる方をサポートできる喜びをまた利用者さんが身に付けられるといいなと思います。

委員

今はたまたまそういうふうな御指導のもとでできたけれども、今までは若いからひきこもりでいるんな目で見てもらえたけれども、一度何か乗り越えていった先の世間の目のほうがすごく厳しい。そうするともっとひどい病気などにならないかと私はすごく思います。彼の話は、私はもう本当に、そんなに甘いものじゃないよ、これからが大変なんだよというような思いで聞いていました。

委員

ちょっと教えていただきたいのですけれども、年代別の登録者数ですが、例えばこの 20 代 136 名で一番多いのですけれども、20 代の中でもとりわけこの位の年齢が利用者の方も年齢として高まっていくようなものはあるのでしょうか。

サポートステーションスタッフ

はい、20 代後半が多いですね。28、29、30 が一番多いです。

委員

もう一つですけれども、年齢に応じて支援の方法を分けようみたいな、そういう対策というのは特に今のところないのでしょうか。

サポートステーションスタッフ

サポステ事業は 15 歳から 39 歳と一くくりになってしまっていて、今は一くくりで受け入れざるを得ない状況なんですけど、やはり年代別にかかわり方を変える必要というのはあるなと考えています。20 代と 30 代後半だと全然違うんですね。30 代後半になると社会をうらんで、自分が総理大臣になって社会を変えるみたいなことを平気で言う人もいたりするんですね。20 代はまだ素直に感じます。それが 30 代後半の方には通じないというもどかしさがあるので、本当はこのサポステ事業も年代で分けたほうがいいんじゃないかなと思います。

委員

関連でなんですけれども、下に通院歴というのがありますけれども、精神疾患を持っているらっしゃる方が 3 割いらっしゃるとあるんですが、ここでおっしゃる 30 代の方のほうが多いということでしょうか。

サポートステーションスタッフ

いや、そうではないですね。もう学校時代からうつ病を患っていたとか、あと診断名が出ていない方も入っています。特に診断名は出ていないけれども、病院に行って薬をもらって飲んでいるという方も含まれています。

福富部会長

年代の分け方が、これは一つの世間一般に通じる 10 代、20 代、30 代、40 代という分け方、これをやるとかえって見えなくなってしまう危険性がある。だから今の質問みたいのが出てくる。例えば学校を卒業して何年、そういう何か違う分け方をしてくると年齢による問題性が見えてくる。こうくくってしまうと、20 代でも前半と後半は全然違いますよ。むしろ 30 前後というふうに考えると問題が見えてくるんですよ。そういうくくり方も考えたほうがいい

いと思いますね。

それから、学歴もそうですね、これも教育の問題というのは非常に深いから。

そんなことで時間になってしまったのですけれども、きょうは本当にお暑い中というか、利用者さんにまず感謝ということで、彼のさらなる成長を皆さん期待していると思っております。それと、本当、お忙しい中を大挙して押し寄せまして、こんな場をつくっていただきまして、本当に十分議論ができてましてありがとうございました。

閉会挨拶

午後3時閉会